

ご挨拶

校長 関口 敏也

今から遡ること30年前、私は機会があってカナダに旅行に行ったことがありました。

バスツアーの休憩時に、飲み物を買うことにしました。「ホットチョコレート」というのが名物らしく、注文することにしました。「ホットチョコレート、プリーズ」と言ったと思います。ところが、聞き返されて購入できません。何度か同じフレーズを繰り返しましたが、通じません。最後にはメニューを指さしてなんとか購入できました。「チョコレート」というアクセントのない、平坦な発音の言葉はもはや日本語なのです。アクセントが英語ではいかに大切なのか、初めて体感した出来事でした。数日後、また旅先で今度はソフトクリームを購入することになりました。メニューは他にはありません。「ソフトクリーム、プリーズ」で通じるはず。ところがまた、何か聞き返されます。後ろに順番を待つ人たちもいて、予期せぬ事態に動揺して、店の人が何を聞き返しているのか、瞬時に判断できませんでした。心落ち着けて聞くと「how many corns?」、つまり、何個ほしいのか、と聞かれていたわけです。

我々の時代の英語教育には、リスニングはありましたが、スピーキングはなかった。とはいえ、簡単な買い物一つ満足にできなかったのはいかにもお粗末で、今も軽いトラウマです。

時は流れ、現在ではグローバル化という言葉が誕生してからも久しくなりました。小学校教育から英語が導入され、延期はされましたが大学入試でも英語の4技能試験の導入が必要視されています。国際化の流れの中で、英語の重要性はますます増していくことでしょう。

そんな時代の先駆けに、本校では平成6年度に創立70周年記念事業を機に、「海外派遣事業基金」が設立され、第1回の国際交流派遣が実施されました。交流を続けてきたアメリカ合衆国オレゴン州にあるサム・バーロウ高校とは、平成16年に姉妹校提携を結びました。以来先方からの派遣団受け入れも含め、昨年度まで25年にわたって交流を継続してきました。

今年度は第26回めの交際交流となり、9名の団員派遣となりました。令和元年11月5日から12日まで、7泊8日の日程で、ロサンゼルスでの社会研修、オレゴン州ポートランドでのホームステイ、サム・バーロウ高校での生徒間交流などを行ってきました。同じ体験をしながらも、各生徒の関心のポイントや感じ方はまちまちです。滞在期間は約一週間ではありましたが、研修報告書からは、その間の生徒の成長の一端を伺い知ることができます。

今後、今回参加した団員が、この経験を糧により成長してくれること、そして研修報告書を読んで他の生徒たちが興味を持ち、来年度の参加に意欲を示してくれることを期待します。

最後になりましたが、四半世紀を超えて継続してきたこの国際交流派遣事業が、今後さらに充実した研修として発展していくことを祈念するとともに、この事業を支えていただいております教育振興会、同窓会をはじめとする関係各位に心から感謝申し上げます。